

平成30年1月1日
●編集・発行●
奥松島縄文村歴史資料館
東松島市宮戸字里81-18
TEL 88-3927 FAX 88-3928



1 Jomon Times

vol. 143

広報 縄文村だより vol.143(1月号)

謹賀新年

旧年はおかげさまで開館25周年を迎えました。イベントでは初めてご参加いただく方も多く、たくさんのお祝いがある1年で、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。



里浜貝塚は発掘100周年を迎えます!

日本の考古学の歴史は、明治10年のエドワード・S・モースによる東京都大森貝塚の発掘に始まりますが、里浜貝塚の研究の歴史も古く、明治30年代には全国的に知られるようになりました。そして、その名を有名にしたのは、大正7、8年の東北帝国大学の松本彦七郎博士らによる里浜貝塚の最初の発掘調査です。多数の縄文人骨が発見され、発掘調査の方法や種論、古環境の分析など、いまに繋がる先駆的な研究がおこなわれました。その発掘から100年。今年は日本の貝塚研究にとっても、節目の年となります。

やります!大・里浜展!

里浜貝塚の発掘百年を記念して、今秋、特別展「里浜貝塚のすべて(仮)」を開催します。東松島市にそんな遺跡があったなんて知らなかった」というあなた。「縄文人なんて関係ない」なんて思っているあなた。地域に息づく歴史とともに、私たち現代日本人につながる縄文の生活や知恵と技を、里浜縄文人が語りかけてくれます。乞うご期待!

* 【冬の縄文村行事予定】 *

企画展「縄文人のからだのみつ」 1/27(土)~4/15(日)

骨から縄文人像に迫ります。縄文人ってどんな顔だったの?体つきは...?病気は...?出産の痕跡も...?人骨に残された痕跡や最新の理化学的な分析から縄文人の暮らしぶりを明らかにします。

企画展記念・講演会 1/28(日) 10:00~12:00 縄文村シアター
「縄文人の顔とからだ」 澤田純明氏(新潟医療福祉大学医療技術学部)
「骨からわかる縄文人の妊娠と出産」五十嵐由里子氏(日本大学松戸歯学部講師)

野蒜・東名運河座談会 1/14、2/25 野蒜市民センター

東名運河や野蒜海岸、陸の松島など野蒜地域の魅力(たから)を活かしたまちづくりについて考えます。

■1/14(日) 10:00~12:00「被災した野蒜海岸の再生に向けて」
講師 平吹喜彦氏(東北学院大学)、後藤光亀氏(貞山・北上・東名運河研究会)
■2/25(日) 13:00~15:00「野蒜のたからを活かした観光まちづくり」
講師 宮原育子氏(宮城学院女子大学)、後藤光亀氏

採集したつるでカゴ作り。

11月18・19日の2日間「つる編みに挑戦しよう!」を開催しました。

1日目は、史跡公園の山へ入り自分でつるを採集します。つる編みに使用するつるは、くるくる木に巻きつけているのではなく、土の中!土を掘り、草をかき分け、を這うつるの採集に没頭しました。採集後は根を切り水洗いして準備完了!



2日目は「つる編み」。まず学芸員の縄文講座から。現代に伝わる編み方は縄文時代には完成していたことを知ると「数千年前にもこんな複雑な編み方が!」とびっくり!
今年の参加者さんのほとんどが初心者。つるの扱いに苦戦しましたが、丁寧につるを編み、素敵な作品を作り上げました。



▲だんだんカゴらしくなってくわくわく♪

例年以上の収穫量にほくほく♥カキ養殖

11月26日「カキ養殖体験②収穫」を開催。4月に種付けをしたカキを収穫し、縄文の道具を使って味わいました。船に乗り、半ばりにカキと再会!ずつしりとした重みに期待が膨らみます。漁師さん曰く今年は例年以上の量!

港へ戻ると、縄からカキをはずし、泥やゴミを取って洗浄。「カキを食べるまでこんなに大変なんだね」と漁師さんの苦労と感謝の声も聞かれました。いよいよカキを試食する時が!シカの角のハンマーと骨ペラを駆使し、カキ剥きに挑戦!「シカ角ハンマーって、金づちよりも優しい使い心地!」と「剥きやすい!」と縄文の知恵に驚いていました。カキ鍋、カキごはんなどのカキづくしランチもあつという間になくなり、匂いの味を堪能した皆さんでした。



▲過去最多の68名のカキ好きさん達。岩手、茨城からも参加!



▲種付けの時にはほとんど見えなかったカキがびっしり!

臨時休館のお知らせ 誠に勝手ながら、1月16日(火)は館内メンテナンスのため臨時休館いたします。ご了承ください。

もっと知りタイ! 地域おこし協力隊 (第9回)

■問 地域おこし協力隊事務局 復興政策課地域振興班 ☎内線1233

かみよし けいこ 神吉 恵子さん(45)

復興支援活動

長期滞在生かして地域貢献

神吉さんは、児童養護施設で生活する子どもたちの健全育成や職業能力の開発、雇用機会の拡充を支援するNPO法人「児童養護施設支援の会」(本部・埼玉県春日部市)の副理事長を務めています。夫であり同法人代表の雄吾さんとともに、東日本大震災では市外の団体として最初に被災者支援を始め、その後も宮城支部を立ち上げて活動を行っています。現在は市内の保育所とさまざまな団体をつなげる橋渡しを軸に、地域に根ざした支援を継続しています。

震災発生時は埼玉県で生活していた神吉さんですが、東松島市でのボランティアが長期にわたるに依り活動範囲は広がり、顔なじみの人が増えました。「地域の方から『いつ帰るの?』『いつまでいられるの?』とよく聞かれたこともあり、こちらでの活動に専念しようと思えました。娘も社会人として独り立ちしており、夫婦で移り住むことにしました」と振り返ります。

震災直後から市内の保育所支援を軸にしており、おもちゃのほか津波で流失した棚やファクス、保育士のエプロンなどの備品をリストアップし、支援団体とつなぐ役割を担ってきました。また、ボランティア団体による人形劇などのイベントも仲介役として子どもたちのために尽力しています。

神吉さんは「年配の方や子どもたちをつないで知識や経験を継承していく。長く滞在する強みを活かして地域に貢献していきたいです」と話し、震災で出会った子どもたちが成長していく様子を温かく見守っています。

